

# 鱸のポワレ短編集

鱸のポワレ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

即興チャレンジみたいなので書いた短編です。

# 目次

優しい悪魔／私が百合に目覚めた日

1

ばあちゃんへの道

僕の中の私

12 9 5

総理



# 優しい悪魔／私が百合に目覚めた日

僕が見ていたのは闇だつた。

辺り一面闇。

どこを見渡しても真っ暗だ。

そんな僕を現実へと引き戻したのは、奇しくも光だつた。  
太陽といのは憎たらしい。まるで悪魔のようだ。俺を気持ちいい夢から引き剥がすこと何万何千回目だろうか。

今日もまた、太陽に被害を受けた僕は、起きて数分で外へと向かつた。  
この行動も何千回繰り返したかわからない。

僕は街を抜けスラムに向かう。なんとも薄汚い場所だろうかと何度も思う。そこにいる人の心すら汚してしまいそうだ。実際、僕を見て笑いかけて来たりするものはここにはいなかつた。

僕は細い道を歩き、進んで行く。

もうすぐで、目的の場所だ。あと数分もしないだろう。

今日は、どんな顔をして待っているのか考えるだけでワクワクする。

その後も細い道を歩き、ようやく一つの穴につく。なんとも汚れた穴だつた。中に入るといつものように彼女は、三角座りをしていた。

今日の顔はムツとした、まるで不機嫌ですと言つているような顔だつた。

「やあ」

僕は、静かに話しかけるが返事はない。

「ここに置くよ」

銅貨が三十枚入つた袋を机に置く。

「なんでいつも、そんなことをするの」

彼女は、ようやく口を開いた。不機嫌だと確信できるその言葉は、僕を愉快にさせた。

「僕は君の天使だからね」

笑顔で答える。

「あなたは天使じやない悪魔よ。毎日銅貨を置いていくから、私の父さんは働かない奴になつてしまつた。いいえ、あなたにされたの」

「銅貨をあげてるのに悪魔は酷いよ」

彼女はその言葉に対し、何も返してはこなかつた。

悪魔か。僕は太陽と同じ悪魔になれただろうか。

自分では天使だと思っている悪魔なんて、タチの悪い悪魔だ。薄汚れた悪魔だ。

☆

「私、あなたに今日も会えて嬉しいですわ」

「ええ、わたしも愛します」

聖カーナス女学園の名物百合カップルが今日も、イチャイチャしながら廊下を歩いていた。

女学園ということもあつて、百合カップルというのは少なくないこの学校。でも私には、正直百合の良さがわからなかつた。

何度か告白された事はあるが、全て断つた。私は異性しか恋愛対象と見れなかつた。そんな私だが、気になる娘はいた。一個下の娘で人懐っこくて可愛い娘だ。

「お姉様、おはようございます」

噂をすればというやつだろうか。その娘は、階段を降りてやつてきた。

「ええ、おはよう」

「ところでお姉様。ニヤニヤと何を考えていたのですか？」

「いえ。何でもないのよ」

「そうですか」

まさか言えないだろう、貴方のことを考えてたのよなんて。

「きやつ！」

その娘が、階段から落ちて転びそうになり、咄嗟に私は手を出す。  
私の腕の中で涙目になる。

「お姉様、ありがとうございます」

「百合つてとてつもない!!」  
なんて可愛いのだろうか。つい、叫び声が漏れてしまつた。

# ばあちゃんへの道

僕は、ばあちゃんが大好きだった。小さい頃からばあちゃんの家に行けば、ばあちゃんが笑つて迎えてくれた。今日もばあちゃんなら笑つて迎えてくれると思った。でもばあちゃんの顔は、お前は誰だ、とでも言いたげにしていて、僕と会つても何の表情の変化も見せてくれなかつた。

僕の大好きだつたばあちゃんは、この世にはもう、いなくなつてしまつたのだ。

ばあちゃんの命日から、数日が経つたが僕は死んだような顔で部屋に引きこもつていた。でも、今日は部屋から出なくてはいけない。今日はおばあちゃんのお葬式だから。「私の母は、昔から物事に対してもハツキリと意見を言いどんな事があつても自分を貫き通す、素晴らしい人でした」

僕の父が親戚の前でスピーチをする。僕にとつてはどうでもいい事だつた。目を閉じて考えてみる。そうするとばあちゃんの声が聞こえる気がする。ばあちゃんが笑いかけてくれる気がする。もちろんそれは願望でしかなく、もうおばあちゃんは笑わない。そう思うとなんとも言えない感情になり、僕は目を開けた。

「ん？」

思わず困惑の声が出た。目の前にはちつちやな一本道しかなく、父やその他の親戚の人達が消えていた。僕は辺りを見渡した。何度も何度も首を振り、状況を掴もうと試みた。しかしここにあるのは一本道。ちつちやな一本道だけだ。不意に頭から声が耳に届いた。

「オマエは死にたいか」

「え？」

僕は驚きを隠せなかつた。

「オマエは死にたいかと聞いている」

「いや、死にたくない」

誰にも聞こえないような小さな声で返す。

「今、この道を渡るとオマエは死ぬ。だがそのかわりにオマエの大好きなばあちゃんとの声が響き、僕の邪魔をした。

「本当か！」

「ああ、本当だ」

それは、今の僕にとつて最高の提案だつた。そのはずなのに、僕の足を止めようと別

「ダメよ健ちゃん。こつちに来てはダメ」

僕のことを健ちゃんと呼ぶ人は、たった一人しかいなかつた。いや、今となつては誰もいなくなつてたはずだつた。

「ばあちゃんなんのか？」

「ええ、そうよ」

「ばあちゃん、今そつちに行くよ」

「来ちゃダメよ」

その声は、すぐ通つてハツキリとした声だつた。しかしその声で僕は驚き、そして絶望した。

「なんでだよばあちゃん」

「あんたがいなくなつたらみんな悲しむ」

「僕だつてばあちゃんがいないと悲しいよ」

「ウジウジしない！男の子だろ」

「でも、ばあちゃん」

「あんたならなんでも出来るよ。若いんだから。ばあちゃんは、その気持ちだけで嬉しいから帰んなさい」

その時のばあちゃんは、笑つていたのだろう。なんとなくそんな気がした。

「で？オマエはどうする」

「僕は元いた場所に帰るよ」

「そうか…」

僕を連れてきたであろうそいつは、悔しそうに呟いた。

「ありがとばあちゃん」

「元気でね」

僕は、光に包まれ数秒で感覚の違いに気づいた。

辺りを見回すと父の姿があり、親戚の人達が座っていた。

火葬前にばあちゃんの顔を見る。おそらく、ばあちゃんの顔を見るのは最後になるだろう。でも、僕はそれでもいいと思つてしまつた。だつて、ばあちゃんの顔は笑つていたから。

# 僕の中の私

あるサッカー選手は言つた。自分の中のもう一人の自分に聞いたと。僕にも、もう一人の自分が僕の中にいた。しかもそれは、リトルなサイズではなくかなりの大きさだ。まるで、本当の自分が飲み込まれてしまいそうなぐらい大きな、もう一人の自分が。それに気づいたのは、小学校5年生の時だった。

その日は、お母さんと買い物に出かけていた。僕は、新しい服が欲しかつたんだ。お母さんに自分で選んでいいと言われ、心が踊つていたのをよく覚えている。初めて自分で選んだ服はスカートだつた。お母さんは困惑の表情を見せた。

「あんた、男の子でしょ？ スカートは普通女の子が履くものよ」

「でも僕これがいい」

僕がそう言つた後、お母さんは落胆し溜息をついた。この時気づいたんだ、僕は少し周りとズレていると。中学校では、自分の履いていた学ランがすごく気に入らなかつた。こんなものすぐに脱ぎ捨ててセーラー服に着替える、と叫びたかつた。その後も、喋り方や気になつている人の話しながら違和感は増していく。

高校生になつて僕は途方に暮れていた。そんな僕を救つてくれたのは、クラスメイト

の高橋だつた。高橋は親友だつた。ノリが良くていつもふざけていた。ある日、僕と高橋は、僕が転んだ拍子にキスをしてしまつた。高橋はふざけ気味に「気持ちわりー」と言つたが僕は、男の人とキスをしたことに対し恥ずかしくてたまらなかつた。違和感に気づいたのか高橋は、僕に声をかけた。

「どうした？顔真っ赤だぞ」

「いや、なんでもない」

「そうか？もしかして、照れてたりして？」

「うん、そうかも」

口を滑らした。男同士でキスをして照れてるだなんて変な奴だと思われたと思つた。  
しかし、高橋は違つた。

「お前、もしかしてそつち系？」

「え、ああ」

「そつか、これまで辛かつたことはあつたか」

「うん」

「そつか。これからは相談しろよ。友達だろ？」

「ありがとう」

高橋は、受け入れてくれた。もう一人の僕を。僕は、いや、私は嬉しかつた。こんな

に嬉しかつたことはなかつた。それから僕と私の生活は、変わつて言つた。スカートを履いた。気になつてゐる人の話しで男子を挙げた。

私は、つまらない人生を送つていた。男の子という自分の性別に囚われて。でも、変われた。高橋のおかげで、つまらない男の子から楽しい女の子になれたのだ。これからだつてどうなるかわからない。でも、高橋の優しさを救いにして生きて生きたいと思う。

僕の中のリトルではないハーフな私が言つた。

「私は、楽しい女の子として自由に生きたい」と。

# 総理

二千三百五十年アメリカとロシアの間で第三次世界大戦が勃発。アメリカ側で参戦した日本はなんとか、勝利はしたものの人口の約四割を失った。経済が回らなくなりテロが多発。日本は、どん底へと落ちて行つた。

「長渕総理、本日も東京でテロが発生しました」

「そうか……」

私、長渕ひろしは二千三百五十年、日本立て直しを期待されて総理に就任した。しかし、何一つとして成功せずに次の選挙を迎えるようとしていた。

「私が東京に行こう」

「何をおっしゃりますか総理。それは危険です」

「危険なのは承知の上だ。早急にヘリを用意しろ」

「はい」

私の秘書である木崎は、渋々といつた形で引き下がつた。しかし、彼も信用はできない。過激派組織との繋がりがあるとの情報も入っている。彼も私の死を望んでいるだろう。

「ヘリの用意ができました」

「うむ。すぐに参ろう」

私と木崎はヘリに乗り込み東京へ向かつた。

「總理。東京に入ります。今や世界でも有数の危険な都市ですでのお気をつけを」

「ああ」

木崎の上つ面だけの言葉に上つ面だけの返事を返す。

「テロの現場に着きました。着陸します」

テロの現場は世田谷区。数十年前とは変わり荒れ果てている。

現場からは、銃声や悲鳴が次々と聞こえてくる。

私は本当にこの二年間何をしてきたのだろうか……。

私達は着陸をして飛行機を出た。それに気づいた人々が罵声を叫び出す。

「おい！クソ總理。テメエのせいで妻はじさつしちまつた。俺の人生も真つ暗だよ。死んで償え」

「そうだそうだ」

「早く辞めろ」

「今すぐ謝罪しろ」

なぜこんなことになってしまったのか、私は残念でならなかつた。

あらかじめ用意をしていたマイクを手に取り私は喋り出す。

「現総理の長済です。日本がこのような事態になつてしまい誠に残念です。ですから、次の選挙で勝利をした暁には皆様の平和を約束します」

「うるせえ。大人しく辞めろ」

「票稼ぎしてんじゃねえ」

チツ、うるせえな。ただの国民風情が。

「黙つて俺にいれりやいいんだよ。ゴミどもが。だいたいな……」

しゃべつている途中に激痛が頭に走る。気づいたら私は倒れていた。  
「総理。あなたは終わりです」

「き、ざき…きさ、ま」

木崎が銃を向けていた。

奴が撃つたのか。クソつ。

「よくやつたぞ木崎」

「お前が総理をやれ」

「とどめも頼むぜ」

クソどもが喜び出す。

木崎が再び銃を向け発砲してくる。

「うあああ!!」

少しづつ意識してが薄れていき、最後は真っ暗になつた。

☆

それから数ヶ月後、総理大臣選挙。

突如、参加した木崎の人気は収まることを知らず総理大臣となつた。